

ハンセン病療養施設の歴史の変遷に関する研究 その1 —国立療養所沖縄愛楽園の事例—

正会員 ○脇田正恵*
友清貴和**
原しのぶ***

ハンセン病 沖縄県 療養所 配置図 変遷

1. 研究の背景・目的

日本のハンセン病に対する対策は1907年の「癩予防ニ関スル件」の制定に始まる。1931年に全面的に改正され1953年には「らい予防法」となり全ての患者を療養所に終生隔離するという厳しい対策をとった。1996年の「らい予防法の廃止」によって一般医療機関で治療されることとなる。一方沖縄では終戦後、本土との行政分離を強いられ本土の政策をもとにした独自のハンセン病政策がなされた。

本研究は敗戦から本土復帰(1945年～1972年)まで米軍統治下であり本土と行政分離をされた沖縄において、ハンセン病療養施設がどのように変遷していったのかを明らかにすることを目的としている。

2. 研究の方法

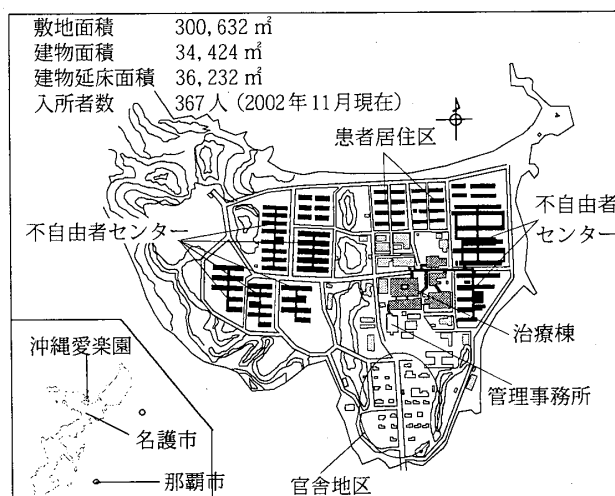
本研究を進めるにあたり以下の2つの作業を行った。

- ①ハンセン病に関する資料・文献および配置図・平面図の収集を行う。(H14年9月19～21日、10月9～12日の2回にわたり沖縄愛楽園と沖縄県公文書館を訪問)
- ②次に各年代ごとの配置図をもとにハンセン病療養施設の歴史の変遷についてまとめる。

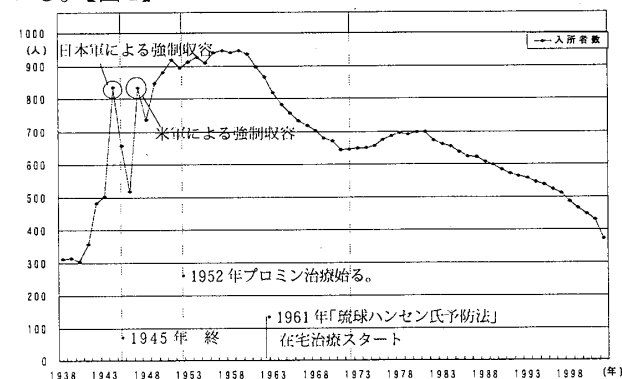
3. 調査対象施設概要

今回、調査の対象とした施設は名護市の屋我地島北部に位置する国立療養所沖縄愛楽園(以下、愛楽園と記す)である。【図1】

開園当時の収容患者数は315人(定員250人)敷地の総面積54,246㎡、建物棟数50棟、建物延面積2,537㎡



であった。入所者数は、1944年日本軍により行われた強制収容によって835人まで増加するが、戦時中の逃走者や戦後の生活の苦しさで死亡する人が多発し1946年に518人まで減少する。1959年には米軍により再び強制収容が行われ947名とピークに達したが、その後軽快退所者の増加や新発生患者の減少により入所者数はゆるやかに減少している。近年は高齢化の進行により2002年11月現在入所者数367名、平均年齢は73.5歳と高くなっている。【図2】



4. 沖縄におけるハンセン病対策の歴史

◇開園当初(1938年～1943年) 日本MTL^{注1)}の救癩活動で沖縄MTL^{注2)}相談所を設置。1938年11月その地にハンセン病療養施設「県立国頭愛楽園」が開園。

◇沖縄戦前(1943年～1944年) 1941年7月1日に厚生省に移管。愛楽園の定員は450人になり、施設拡張工事が進められる。

◇琉球列島米国民府時代(1950年～1951年) 終戦後、一時的に沖縄行政は真空時代となったが、間もなく米軍政府がらい行政を行うことになった。

◇琉球政府時代(1952年～1971年) 1952年、琉球政府の創立に当たり、療養所は琉球政府に移管。沖縄愛楽園と改称される。1961年8月、琉球政府は「琉球ハンセン氏病予防法」を制定、公布。本土の「らい予防法」にない「在宅治療制度」という制度が織り込まれた。

◇本土復帰(1972年～) 1972年5月、本土復帰によって「ハンセン氏病予防法」は廃止になった。法廃止後も沖縄のみ「在宅治療制度」は継続実施され、今日に至っている。

以上のように、ハンセン病対策は5つの時代に分けることができる。

	開園当初 1938年	空襲前 1944年	米国民政府時代 1951年	琉球政府時代 1971年
建物配置				
管理施設	事務所、所長官舎、泰任官舎、判任官舎、雇用人官舎、看護婦官舎、官舎浴場、職員浴場	事務所、所長官舎、泰任官舎、判任官舎、雇用人官舎、看護婦官舎、官舎浴場、職員浴場	本館事務所、官舎浴場、看護婦官舎、保育所、一級官舎、二級官舎、三級官舎、付属更衣室	事務所、職員浴場、職員官舎、医師官舎、看護婦官舎、教員官舎、済井分校長官舎、来客用宿舎、保育所
医療施設	医薬局、試験室、治療棟、消毒棟、重病棟、隔離病棟、更衣室、死体処理室	医薬局、試験室、治療棟、消毒室、重病棟、隔離病棟、更衣室、死体処理室、精神病棟	医局薬局、治療棟、重病棟、精神病棟、試験室、薬品庫	治療棟、精神病棟、旧精神病棟、A病棟、B病棟、病棟浴場、医官室、薬局、洗濯・消毒室
その他	監禁室、患者面会室、患者浴場、礼拝堂、洗濯・裁縫室、売店・理髪店、作業室、倉庫、監視所、共同便所、炊事場、食料品庫、動物飼育室、火葬場	監禁室、患者面会室、患者浴場、礼拝堂、洗濯・裁縫室、売店・理髪店、作業室、倉庫、監視所、共同便所、炊事場、食料品庫、動物飼育室、火葬場、恩賜記念館、豚舎	礼拝堂、工務部事務所、工務部資料倉庫、火葬場、畜舎、肥料倉庫、共済会事務所、炊事場4	中央炊事場、自治会事務所、バスマン会館、公会堂、日曜会館、納骨堂、教会堂、盲人会館、売店、理容室、教会堂、面会室、職業補習室、洗濯場、集会・配給所4
住居棟	患者住宅、夫婦住宅	患者住宅、夫婦住宅	男子不自由者病棟、青年宿舎、独身者病棟4、夫婦者病棟3	独身不自由者寮、夫婦不自由者寮、児童寮、盲人寮、独身者住宅3、夫婦者住宅9、老人ホーム、モデル不自由者寮

図3 年代ごとの配置図

5. 建物配置の変遷 [図3]

◇開園当初 開園当初は沖縄MTL寄附にかかる2棟をはじめ、1棟165㎡の平屋建瓦葺の居住棟が10棟。このほか共同炊事場、消毒室、重病室、浴場、売店、理髪室、隔離病棟、洗濯場、礼拝堂、事務本館、医局、薬局、試験室、治療室、面会室、それに職員官舎の高等官、判任官、傭人官舎と53棟の建物があった。

開園から6年間は、木造瓦葺住居での生活であった。

◇戦時中 1941年施設拡張工事が進められ、これまで運動場として利用されていた場所に居住棟が7棟建てられた。当時の愛楽園は純日本風の切り妻造り住宅で、計65棟の建物が建ち並んでいた。

空襲後の1945年、愛楽園の建物65棟のうち、消失、全壊、半壊したものが58棟で傷つきながらも使用できたものは、婦長官舎、医局、職員浴場、面会室、動物飼育室、監禁室、恩賜記念館の7棟であった。

◇琉球列島米国民政府時代 終戦後、愛楽園の復興を始め、従来の療養所の形態でなくそれぞれの生産技能者別のコロニー方式の形態を作り出していた。治療棟や病室を中心にし、近くに不自由者寮、少年・少女寮など介護を要するグループと、その介護に当る青年や乙女たちの寮を一群にして「花園区」とした。北海岸の磯近くに漁をする人たちが暮らす「磯浜区」、農作業に便利な西側耕地寄りが「月の里区」、入園者自治会業務に従事しやすい地域に「星の原区」といった配置計画だった。

居住区の建物は、夫婦舎に規格茅葺住宅(9坪)が造られ、米国民政府から譲り受けたコンセット資材^{注4)}で39棟の各施設が造られた。

◇琉球政府時代 この頃から現在の配置と同じような配置計画が見られる。琉球政府は、戦後の混乱状況からようやく立ち直ってきた愛楽園の恒久建築計画を推進。1953年鉄筋コンクリート2階建ての独身棟を機に恒久建築がスタートした。宗教施設など医療以外の施設の充実が図れるようになり、高齢化に伴い老人ホームなどの施設が見られるようになる。また、1979年に独身棟が、長年の大部屋生活から個室生活へと変わった。

6. まとめ

配置計画は、1938年の開園当初必要最小限の施設でスタートしてから、戦前までは入居者の増加に伴う施設拡張が繰り返された。戦後、空襲により園内のほとんどの建物が消失する。琉球米国民政府によって、コンセットや茅葺住宅などの仮設建築が建てられ、コロニー方式を用いた建物配置が行われた。琉球政府時代になると、園内の本格的な復興が始まり恒久建築が建ち始める。現在の基礎となる施設配置が行われた。

愛楽園は、戦後の米軍からの復興作業や物資の援助により米軍政府と深い関わりを持っており、配置計画はその影響を受けて変遷していると言える。

—注釈—

- 注1) 日本最初の民間の救済支援団体
- 注2) 日本MTLの沖縄支部
- 注3) 集団居住地
- 注4) アーチ型のトタン葺きで建てられる仮設の建物

—参考文献—

- ・平成13年度修士論文ハンセン病療養施設の建築計画に関する研究 西室田 周作
- ・命ひたすら 療養50年史 国立療養所沖縄愛楽園入園者自治会
- ・沖縄における癩管理の現状 犀川 一夫
- ・沖縄における癩の外来治療の諸問題 犀川 一夫

* 鹿児島大学大学院 修士前期課程
 ** 鹿児島大学教授・工博
 *** 鹿児島大学研究生

* Research Student, Dept. of architecture, Kagoshima Univ
 ** Prof., Dept. of architecture, Kagoshima Univ, Dr. Eng
 *** Graduate school, Dept. of architecture, Kagoshima Univ